

パネルディスカッション

【 パネリスト 】 福島健一郎、青木和人、木村博司

【 コメンテーター 】 山本 昭、内浦有美

【 司 会 】 是住久美子

山本 私は、もともと理系の化学の出身で、それから図書館情報学を研究しました。それで国立というか、理系の研究所の情報部門でデータベースの作成などをやっていたりして、それで、もう20年ぐらい前か、それから教えるようになっていきます。本学の現代文化コース図書館情報学専攻の教員をしています。どちらかという、私のバックグラウンドが理系で、学術情報というものを主に扱ってきたという面から、いくつかコメントをさせていただきたいと思います。

こういったデータに関して、作成する側、それを発信する側、もう一つは、それを利用する側、あるいは解釈する側の二つがある。さらに、その中で、たぶん、その生データを発信しても、ほぼ使えないということで、それを仲介するインターメディアリーというか、場合によってはライブラリアンというか、図書館の方も関係するのかなと思います、そういう真ん中の部分と、その三つのフェーズがあるのではないかと思います。

それで、青木さんの方は、どちらかというデータをつくられる側という立場、木村さんは、それを利用する側、あるいはその利用者といろいろな立場の人たちをも巻き込む活動とお見受けしました。福島さんが最初に言っていたのですが、福島さんの立場は、どちらかという二つのつくる側、提供する側と、使う側を仲介するような立場でお仕事されているのではないかと思います。

そのなかで、私が、こういう問題を扱う時に気になっているのが、福島さんが言われた「毒にも、薬にもならない情報ではなくて、場合によっては迷惑な情報もある」ということです。例えば、犯罪のところでおっしゃった問題です。それから、もう一つは、データの質というものが、どのように担保されているのかなということです。そういうところで、例えば、もともとのデータのつくり方、使われ方が分からないというか、それがよく理解されないまま利用すると、危険なところもある。それは確かだと思いますが、そういう部分。それが場合によっては、提供する側と、利用する側の間の信頼関係を損ねるような話になるのではないかな。そのところが、今日の話のなかで、もう少し踏み込めるかなと、あるいは、ここは踏み込みにくいところなのかなという感じを持ちました。

それで、ウィキペディアの話などもありましたが、結局、ウィキペディアにしても、データをつくることは簡単ですが、質の管理は重大な問題で、編集者の仕事というのは重く、過剰な負担をたぶんかけているのだと思いますが、その部分が、やはり、「これ誰がどうやる

のか、これ大丈夫なのかな？」というところが、私は気になるところです。

例えば、デマのようなものを書かれたり、不正確な情報を書かれたり、あるいはそれを打ち消すというようなことでよく編集合戦というものがあるようですが、そういうこと、あるいは、例えば、政治的あるいは商業的な宣伝に陥る危険などを排除していくのが、かなり厄介な仕事で、それをやることによって、今度、逆にウィキペディアの中で、言い方が悪いですが検閲体制なるものができあがってしまうという危険もあると思います。ですから、どちらかというところ、その真ん中の仲介する部分のところの機能が、これから重要になるのではないかという気がしました。

それから、木村さんの発表の中で、いろいろと、うどん屋さんを巻き込んでというような、地域を巻き込むことをなさっているということですが、これも先ほどの質問の中にも出てきたのですが、「それ、面白いな」として取り組む人も、「なんだこれ？」とちょっと冷めて、エンジニアから見るとダサいという話がありましたが、そういう目で見ると、それを広く巻き込むところに、まだなかなか難しさがあるのかなという印象を受けました。私のコメントは、以上です。

内浦 内浦と申します。私の仕事は、二つあります。一つは、地域の魅力を発信するお仕事とか、地域にある課題を解決する、支援をさせてもらう仕組みを考える仕事をしています。二つ目が、キャリア教育などの教育全般の研究だとか、支援をさせてもらっているわけです。

先ほど木村さんのお話のなかにもありましたが、二つ仕事があるといった一つ目の方ですが、難しい方よりも、どちらかというところ、皆さんには、妖怪の方で知ってくださる方も多いと思いますが、妖怪の領域の仕事をしています。妖怪って形がないのです。形がないと不思議なんですよ。行政、国も県も市も、「面白いね」と言ってくれるのですが、形がないものに、なかなかお金を出せないとか「認定できない」とかよく言われるんです。でも子どもたちには大事だと。「じゃあ、どうやって残していったらいいかな」と言って、いろいろな方に相談した時に、「面白そうだ」と言って、手を挙げてくださったのが、「うずらインキュベータ」の皆さんでした。ここに私は光を見ました。

ものすごい勢いで、いろいろなことが変わっていく世の中で、100年、200年ではなくて、1,000年続くような地域の宝物である地域資源を、どのように今後の100年、200年、1,000年後の豊橋につなげていくかといった時に、このオープンデータとか、シビックテックの人材の皆さんですね、人材とか、テクノロジーとか、先ほど三角形のピラミッドにもあった一番上の「知恵」の部分に可能性を見いだしました。

「うずらインキュベータ」の皆さんに手伝ってもらって、豊橋の妖怪をオープンデータにした時、「あっ、これからの世の中、たぶん、地域のなかでも、こういうことが起こってくるんじゃないか」という縮図を見たわけです。民話とか、地域から語り継がれている話とか、妖怪とかは、口で伝える、口でつなぐ「口承文学」と言われていて、これは文学だけではなく、文化・風習・信仰等々なんでもそうだと思いますが、これをどのように次世代につなげ

ていくかという、今、切り替わりのポイントにある、私たちは……。そういった、目に見えないけれども、私たちがとても大事にしてきたもの、もしくは、形に残っていないけれども、これから形に残したいものを、シビックテックとか、オープンデータを活用させてもらう、もしくは、そこに携わる人材の人たちに知恵を出してもらうことによって、新たな形にして世の中に残していく、もしくは、それを使って新たな課題を解決していくという、とてもいい経験を、この生まれ育った、そして、今も住んでいる豊橋という地でさせてもらっています。

ですから、私だけでなく、もちろん恩恵を、こうして集まられている皆さんのそれぞれの市町で、そういうことが起こっている。それが、いわゆる、お三方がお話しされていた、一番、今日、私の心にズドンときた言葉でもあります。「自分のまちを、自分たちでつくることができる。今、住んでいる自分たちのまちも、これからの未来の自分たちのまちも、今、自分たちでつくりつつ、つくっていくことができるのだ」ということが、今日、一番強く心に残ったことで、私もつくっていく活動に、これから一緒に参加させてもらいたいなと思いました。以上です。

司会 ありがとうございます。それでは、先ほどの山本先生のコメントの中に、どうなっているんだろうというところがあったと思いますので、あらためて、福島さんに聞いてみたいと思います。

山本 先ほどの「犯罪情報の可視化」というところで、福島さんがメリットとデメリット、それを天秤にかけなければいけないということをおっしゃいましたけれども、その天秤というところに、やはり利害が、市民とか、あるいは、いろいろなセクターの利害が出てくると、その天秤というのが、非常に難しいさじ加減になるのではないかと感じたのですが、そのへんは、福島さんの場合は、どのように考えていらっしゃるのか、あるいは、どう解決するものなのかということをお聞かせいただければと思います。

福島 そうですね……。その天秤は、人によって重みが違うと思うので、誰もが満足する答は、たぶんないと思います。欧米のやり方が正しいかどうかは別として、やはり、できるだけ多くの人の利益になるかどうかという方で見ているので、一部の住人にとっては、ちょっと嫌だなと思うことがあったとしても、それよりも犯罪が減るとか、危険なところの情報を知ることによって住民が安全な、安心できるといったものの方が、大きい影響を及ぼすと思えば、やはり、そちらの方に振るだろうと。

だから、公共の利益として、多くの人利益を得られるのかということが、一番の判断材料なのかなとは思っています。ただ、日本が、そのとおりになっているかどうかは、また別の話だとは思いますが、日本の場合は、そうっていないところもあるのかもしれないですね。

山本 そうすると、やはり、そのへんの、情報をどう扱うか、それに対する利害を、公共的なもの考えるのか、やはり、一人一人の住民の不利益も考えなければいけないのかというところは、やはり、何と云うのかな、その文化の問題というか、そういうところに、結局は

なってしまうというか、そういうことですかね。

福島 そうですね。例えば、私は一般社団法人 Code for KANAZAWA を始めた時に、最初にやりたかったのは、子どもの安全の確保ということで、不審者情報をオープンにして、それを可視化することをやりたかったわけです。例えば、春は、このへんに変な不審者がよく出るとか、そういったことは、あらかじめ、だいたい地域の人は何となく分かっていたし、もちろん、警察も、ある程度、把握していたりしているわけです。でも、住民は、そんなに系統立てて分からないので、学校から「なんか不審者が出ましたよ」みたいな情報をメールで受け取って、「あっ、また出た」みたいなことを言っているだけだったので、そういうものを大量にできるだけのデータをオープンにしてもらって、地図上に落とし込んで、季節とか、いろいろな時間とかで、フィルターかけると、いろいろなことが市民も分析できると。あとは、お母さんたちが自分でどうするかは任せればいいので、そういうことをしたいと思ったのですが、あっさり断られたわけです。警察の知り合いとかも通じて、別に愚痴とかではないですが、石川県警とかにも、結構、行っていたのですが、なかなか出せない。それは、先ほど、お話したように、そういうデータが出ると、そこに住んでいる人が嫌がることもあるのでなかなか出せない。もちろん、犯人の個人情報のものも出せないし、いわゆる、「犯人が推定できるようなことになっても困るし……」と言われたわけです。

ただ、昨年、警察庁が「そういうものは出していくんだ」という発表をしたように、だんだん時代的には、そういう公共の利益の大きいほうに振っていかうとしているのではないかなと思います。だから、ちょっとずつ、みんなが訴えていけば変わるのではないかなと思います。

司会 ありがとうございます。先ほど、同じく山本先生の話の中で、ウィキペディアの質の部分で、どのように担保するのかとか、編集合戦になったりとか、そういうところを青木さんにお答えいただければなと思います。あと内浦さんがおっしゃっていたみたいに、目に見えない伝承とか、そういったものをウィキペディアで、いろいろな各地でやっていると、そういうものも残したいとか、文献にないようなものも残していきたいという要望があったりしたと思うのですが、そういうものに、どのようにお答えしたり、考えたりされているかということをお聞かせいただければと思います。

青木 ウィキペディア自体は、誰でも書くことができるのですが、でも中には、いわゆる「荒らし」みたいな人とか、誹謗中傷する人みたいな人もいるわけです。ウィキペディアの世界では、特定の権限を持った管理者がいます。その人は、特定のアカウント、「もう、この方、何回もそういうイタズラばかりする」とかというアカウントの人は、しばらくは入れないようにするとか、あと先ほど、編集合戦みたいなものことになって、もうどうしようもないようなものは、一時的に、誰もが編集できないように、いったん止めてしまうということをする権限を持った管理者が、ボランティアでやっていただいている人たちですが、日本語版ウィキペディアの管理者が何名かおられます。

僕は管理者ではありませんが、そういうところは、ボランティアな世界で対応いただいています。ただし、明らかにイタズラとか、イタズラのようなものは、その管理者で対応いただいていますけど、内容については、例えば、今でもウィキペディアの内容については、思い込み的な内容を書かれてるような記事なども、まだまだあつたりします。

そもそもウィキペディアは、今でも小学校の先生は、子どもたちに「ウィキペディア、あれは信用したらあかんで」と教えたりしています。実は、うちの子どもも、そう先生に教わったので、「お父さん、ウィキペディア信用したらあかんで」と私に言ってきたのですが、それはある意味正しくて、ある意味間違っています。ウィキペディアは誰でも書くことができますから悪意を持った人が書くこともできる。きちんと調べないで、自分の思い込みを書いたりする人もいます。その意味で言うと、いわゆる今までの紙の百科事典は、偉い大学の先生が編集者になって、ある意味でその人の「バイアス」のかかった百科事典ですが、でもその人の監修のもとでの文章でしたが、ウィキペディアは、誰もが参加できますから、誰もが自分の考え方で文章を書くというような仕組みです。

ただその質を、私たちはもっとより皆さんに信頼してもらえるような内容に高めていきたいと思っています。そのためには、自分が思ったことを書くのではなくて、いわゆる世の中にある文献をもとに、その文献の出典、「この本に、こういうふう書いてあるんですよ」という出典を付けて、ウィキペディアを、ぜひ、みんなで書くようにする。そういうふうになれば、例えば、「この表現って本当かな」と思った時には、その出典の文献を当たれば、本当に、そうなかどうかということが分かります。

もっと言うと、本当に、その言っていることが正しいかとかというのは、世の中にある文献を含めたさまざまな情報のなかで、最終的には自分が判断することです。ただ、そのための手がかりを、しっかりと記述した上で、ウィキペディアを書きましょうと。ウィキペディアの書き方を、誰も教えてくれないですから、それをお伝えするようなことも活動としてはやっています。

あと、妖怪とか、形になってないものを、ウィキペディアみたいなもので情報を発信するという話ですが、その意味で言うと、この考え方で私たちはやっているんで、私が「なんか、そういう妖怪があったように聞きました」みたいなところでは、それは出典がないので、今は、そういうかたちでは書くのは、ちょっと無理ですと言います。

ただし、それに対して、例えば、地域での伝承を書かれたような、それこそ郷土資料みたいなものがあれば、その郷土資料をもとに書くこともできます。「ただ、今は、ちょっとそれは文献はないんだ」ということがあれば、いっそのこと自分でいわゆる聞き取りをして、地域史自体を、いきなりウィキペディアに書けないのですが、まずは自分でつくってしまう。作ってしまうということをするれば、いわゆる一般的にアクセスできる書籍なりのものの形にすれば、それを出典にしてウィキペディアが書ける。というので、「ちょっと郷土史つくってみてはいかがでしょう」みたいな提案になるのではないかと思います。

内浦 青木さんも言ったように、「なかったら、自分でつくればいいんじゃないか」ということも含めて、私のような世代はもう古くて、学校で、そういう教育を受けてこなかったわけです。先生が「ウィキペディア間違っているんだよ」って、「それも一理あるんだけど……」みたいな……。

学校現場だけではありません。社会人になってからも、こういう世の中だから、小・中・高校生だけではなくて、大学生だけではなくて、大人も含めて、そういう教育をちゃんと受けたいということ、今日は、お話を聞きながら感じて、お三方に加えてお聞きしたいのですが、一般市民の人たちが、そういうことを、今日みたいな話だけではなくて、ちゃんと知ることができるようになるためには、もっと気軽に自分たちで活用するためには、どうしたらいいでしょうか。行政も巻き込んで、シビックテックメンバーとか、コード・フォーメンバのされている活動だけではなくて、「もうちょっと世の中が、こうなったら」とか、「もうちょっと市民がこうなったら、もっとこういうふうに、ちゃんとみんなで教育を共有して豊かな社会をつくれるシビックテックとか、オープンデータを活用しながらなるのに……」というのを教えてもらえたら、うれしいなと思いました。

木村 われわれも皆さんと接触する機会を、正直に言うと求めています。そういったところに顔を出してもらおうと、実はプログラミング教室をやっていますとか、われわれみたいなシステム屋だけではなくて、いろいろな方がいらっしゃいますので、そういった方々から、たくさんの方から知恵をいただくことができるのかなと思います。ひいては、自分の知りたいことも分かるのかなという答でどうでしょうか。

内浦 ありがとうございます。私も豊橋市の教育委員をさせてもらっていることもあって、「教育の現場でも、どうなっていくといいな」というのがもしあったら、興味ある参加者の方もいらっしゃるのではないかと思います。いかがでしょうか。

福島 私は、テクノロジーのリテラシーを、市民に広げるのが最も大事なのではないかと、最近、感じているところです。

「テクノロジーリテラシーとは具体的にどういうものですか？」という質問もありました。プログラミング教育とかそういうのではなくて、たまたまですが、富山大学の芸術文化学部というところがあって、将来、芸術家になる人たちに、「情報の教育をしてほしい」と言われた時に、プログラミングを教えるもしかたがないので、「彼らに、コンピュータとか情報社会とは、いったいどういうものなのかを教えてください」ということを、何年間か授業を持たされました。

その時に、いろいろ試行錯誤してやっていったのは、実際に技術によって社会が変わっているといういろいろな事例とか、それがなぜ変化してしまうのかみたいな、そういう事例と、なぜそういう事例が起きたのかという、なぜ影響が起きたのかということ、細かく細かく一つずつ説明をしていったことでした。コミュニケーションの分野ではどんなことが起きたのか。政治という分野ではどういうことが起きたのかとか、そういう授業をしたわけです。

15 コマ、1 コマずつ、そういうことをしていったのですが、そういうのをやった時に、結構、学生たちには評判もよかったなということも感じていて、技術の勉強はしたことがないけど「あっ、技術によって、こんなふうに変わるんだ」みたいなことが少しでも分かったら、「今から IoT でスマートシティやろうよ」という話が出て「なんだ、それ」って言って、もう思考が停止して「もうそんなことに税金を使うのもったいないじゃん」っていうことにはならないのかなど。良いか悪いかは置いといて、まずは議論をしようみたいになるのではないかという気はしています。

司会 時間も迫っているので、会場の皆さんから答えてもらえればと思っているのですが、まずお一人、「オープンデータの冊子を使いたいです」って書いてくださったのが、どなたかが分かれば、ちょっと後でお渡しできればと思いますので、差し支えなければ挙手していただいて、どういうお話を聞いて、どのように感じて、そういうふうに使われたのかとかも、お話しいただければと思うんですけど。

会場の男性 豊橋商業高等学校から来ました。私が抱えているというか私の生徒が抱えている課題を解決する何かヒントになるものはないかなと思って参加させていただきました。まさに、本当に目から鱗と言いますかたくさんアイデアをいただいたなと思っています。

課題というのは、授業のなかで「課題研究」という科目があって、テーマが広い各講座があるわけです。要は、困っている人を助けたい、助けるんだというのが課題研究なのですが、ただ漠然と困っている人とか、今までは、困っている人とか、困っていることとか、実際に企業に行って話を聞くというところから始めていたのですが、そこから広がっていかないなということはずっと思っていて、今日の話聞いて本当に参考になりました。

それと、もう一つ、もう私たちの年齢では、これから起こってくるような問題を解決できないなということも、ここ最近実感しています。若い子の力を引き出すために、本当に今日の話も、うちの高校の生徒にはしてほしいなと思ったし、その前に、冊子で、このオープンデータの話を読めば、何か生徒のほうも、自分で考えてアイデアが出るのではないかなと思って書かせていただきました。

司会 ありがとうございます。こちらの質問の中でも、「小中学生などに、こういうことを関心を持ってもらうにはどうしたらいいのか」みたいなこともあったと思いますが、若い人たちと一緒にやっている木村さん、どのようにお考えでしょうか。

木村 私が一緒にやらせていただいたのは大学生でしかも技科大生が多いですから、彼らの関心事項はテクノロジーなんです。小中学生はまた違って、ゲームだったり、動画なのかもしれませんが、彼らの関心事項とこういったシビックテックおよびオープンデータが重なる部分はどこかにあると思うので、そういったところがフックになって、彼らの興味を引き出せたらいいなと思います。

司会 青木さんは、高校生向けにウィキペディアの編集イベントをされていますけど、関心を持ってもらうような工夫とかありますか。

青木 単純にウィキペディアは高校生がみんな知っているので、「あそこに書くねんで」と言うと、ちょっと「おお、すげえ！」みたいなところがあって。逆に高校生の方がわれわれ大人より真面目で、しっかりと書かなければいけないということで、結構きっちりと資料を読んで書いたりしてくれます。むしろなんか若い人にこの活動はやってもらった方がいいのだろうなと思っています。

司会 スライドの最初の方に、福島さんの講演の時とかに、「データを出したからといって、市民参加につながるのか」とか、住民が行政に対して思っていることと、行政が住民にやってほしいこととか、ズレがあるのではないかと、という声があったということでした。

木村さんのお話でも、「風が吹けば、桶屋が儲かる」みたいな話は、オープンデータのポータルサイトに出せば、すぐにいろいろなことが解決につながるのかといえば、そういうわけではないという話もあったと思います。行政とか、市民とか、民間とか、金沢では、どのようにうまく工夫してされているのかというところをお聞きしたいと思います。

福島 工夫というか、金沢で何かスペシャルなことができているわけでもないのですが…。確かにデータを出しても、利活用されるかは別ですが、ただ「利活用されないんじゃないか」と言ってデータを出さないのは違うというのが、「オープンデータの公開をしましょう」と言ってる側からするとそういう考えにはなっています。

なぜかという、データがインフラだったりとか、必要なそういう、水とかと同じものだろうというイメージです。だから、それを隠している、税金でつくっているにもかかわらず、それを出さないということは、原則ないのではないの？と思います。

それが出て、実際に、まち自体も活用するだろうし、市民も活用してもいいし、企業も活用していいと思っています。そのなかで、「市民は活用しないんじゃないの？」と言われると、確かにそうかもしれないですが、それはどちらかという、市民の側の問題であって、それがなされないからオープンデータが悪いというわけではないと思うわけです。「市民力」というものを上げていかなければいけない、「自分たちでもできるよ」ということを上げていかなければいけないと思います。

人口が減っているにもかかわらず、市民のニーズは多様になってきていて、おそらく、ここにおられる方、皆さんが全員同じ共通のサービスを受けられればいいのかという時代ではなくなっています。そうになると、意外に気付かないですが、皆さんが「なぜ、行政はこれやってくれないんだろう？」という、「これ」というのが、一人一人違うわけです。だから、「これをやってくれ」と言って腹を立てていても、隣の人は「いや、そんなことじゃなくて、こっちをやってほしいんだけど」みたいな話になってきます。それを、少ない人口になっていく中で「やっぱり、やってくれ」というのは、なかなか無理があります。そのためには、限りある財源を考えると「自分たちでできることは、自分たちでやらなくちゃいけないんだ」ということに気付いて、そこにデータが使えるといいのかなという思いはあったりします。

だから、その意味では、今まで確かにやってないことなので、「そういう教育を受けてない」

というお話もありましたけれども、そういうことができる時代になってきたということで、今からでも勉強してもいいのかなと、そういう社会をつくっていこうと思ってもいいのかなと思っています。